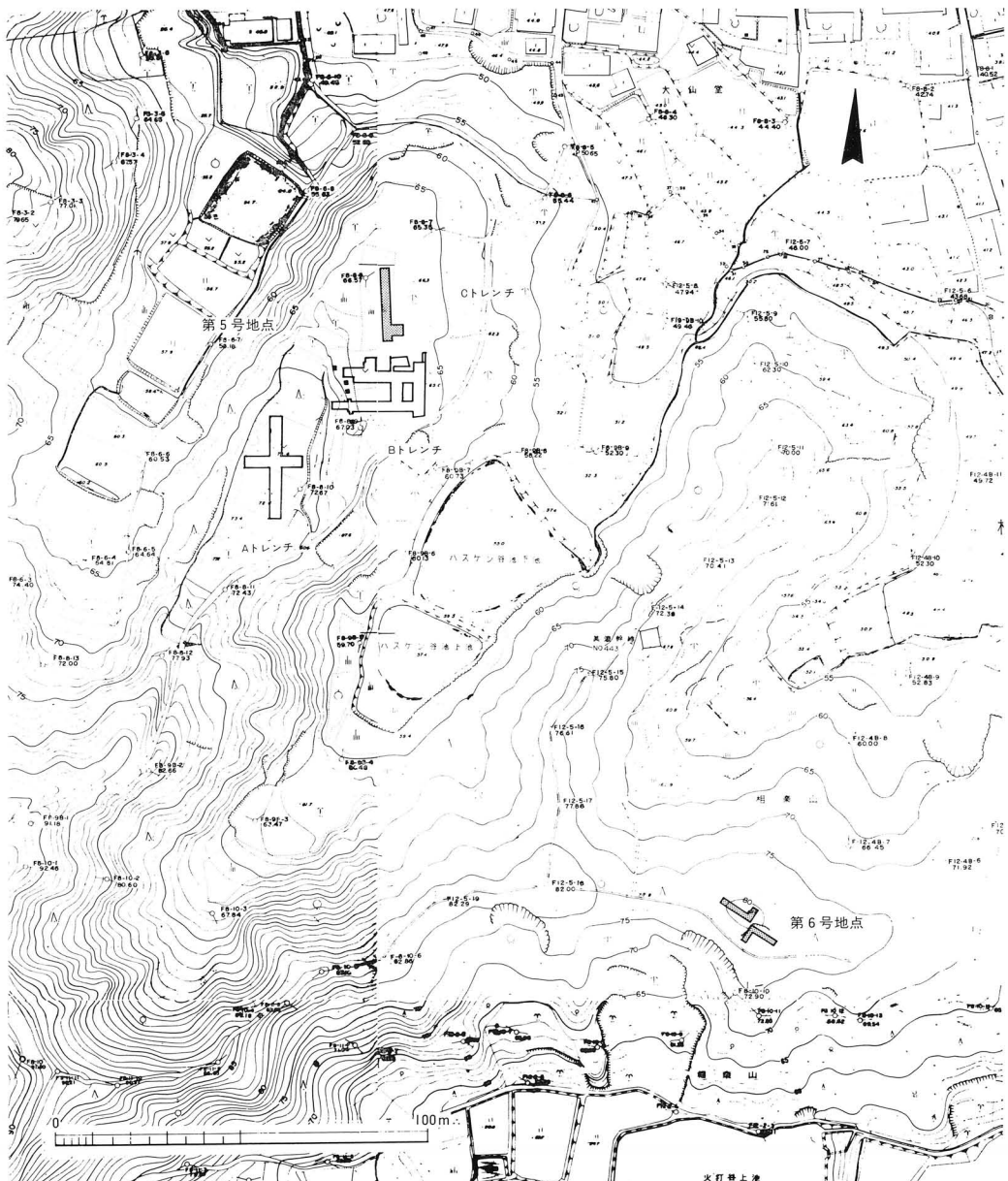


IV 曾根山地区の調査

調査地は奈良山丘陵の東北端にあたり、音如ヶ谷から北へ約500mに位置する。第5号地点および第6号地点の2ヶ所を調査した。両地点ともに西南から東北にのびる支丘陵上であって、相互に谷一つを隔てる。両地点ともに、1964・1965年に行われた分布調査で遺物の散布が報告されており、また土地の形状からも遺跡の存在が予想された。第5号地点の南に近接して1972年に調査を行っている。



第31図 曾根山地区地形図（網部分：本年度調査区）

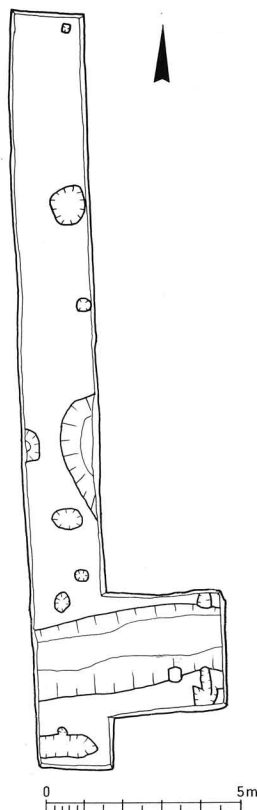
IV-1 第5号地点（大仙堂）

調査地は標高66mの尾根上で、現在竹林となっている平坦面が開けており遺跡の存在が予想された。この付近からは、奈良時代の瓦が出土し、また通称「薬師山」と呼ばれ、近くに「大仙堂」の地名があることから、古代の寺院の存在が予想され、薬師堂廃寺跡あるいは大仙堂廃寺跡と称されてきた。1972年の調査では支丘陵のほぼ中央部に2ヶ所の発掘区（A・Bトレンチ）を設けたが、溝や土壌を検出しただけで古代の寺院跡は確認できなかった。ただ室町時代以降の巴文軒瓦や灯明皿、江戸時代初期と思われる一字一石経が出土したことから、中・近世の寺院跡の存在が考えられるようになった。今回の調査は、この寺院跡の確認を目的として行ったが、関連する遺構を発見することはできなかった。

支丘陵南端の平端面の竹林に20×2mの南北トレンチとそれに直交する3×3mの東西トレンチを設定した（Cトレンチ）。前回調査のBトレンチに北接する。厚さ30～60cmの黒色土（表土）の下が、遺構である地山となる。主な検出遺構は、溝一条・土壌4個である。トレンチ南端に検出した東西溝は、幅2m、深さ50～60cmの素掘りの溝で、東西5m分を確認した。水の流れた痕跡はなく褐色砂で埋められていた。東西溝の南では東西に長い溝状の土壌を、トレンチほぼ中央部では東・西壁にかかる2個の土壌を検出した。遺物は少なく、特に東西溝より北はほとんど出土せず、東西溝埋土と溝以南の表土から少数の近世の瓦・灯明皿・陶器が出土したにすぎない。

2回の調査によって、古代はもちろん中・近世の寺院跡を確認することはできなかった。しかし、前回調査のBトレンチで、室町時代以降の巴文軒瓦を含む多くの瓦や、江戸時代初期の一字一石経の出土からみて、室町時代から近世にかけて何らかの仏教的施設の存在が考えられる。今回検出の東西溝は近世の遺構であるが、溝を境として南北で遺物の出土状況に相異があることから、この溝はそうした施設の北を画するものとみられる。

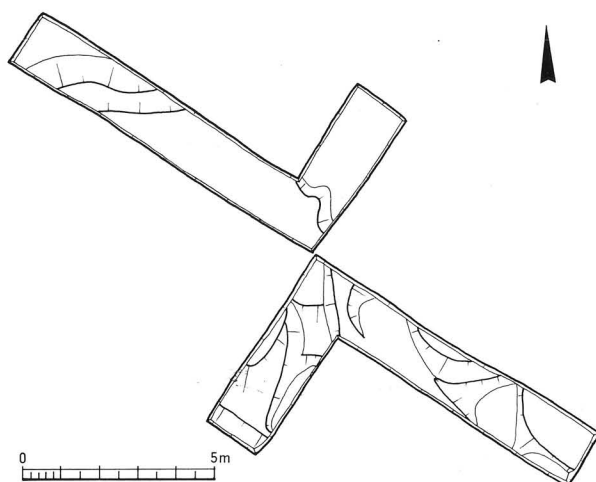
この支丘陵上の遺構を考える上で、谷を一つ隔てた東方の支丘陵にあった墓地の存在が注意される。標高70mの西南から東北にのびる支丘陵で、通称「ハカヤマ」と呼ばれる。南端の山への登り口に六体地藏（天保九年銘）があり、尾根上と東斜面に墓石が散乱している。墓石の大部分は、船形光背の形で五輪塔を刻した、所謂「背光五輪」型のもので、中央に梵字と戒名、左右に年紀と月日を刻する。紀年銘は天文二十一年（1552）を最古とし、天保九年（1838）に及び、この「ハカヤマ」が室町時代後期から江戸時代後期にかけて墓地であったことが明らかである。第5号地点出土の遺物は、この墓地の時期と重なることからみて、想定される仏教的性格の施設は「ハカヤマ」の墓地と密接な関連をもつものと考えられる。



第32図 第5号地点遺構図

IV-2 第6号地点

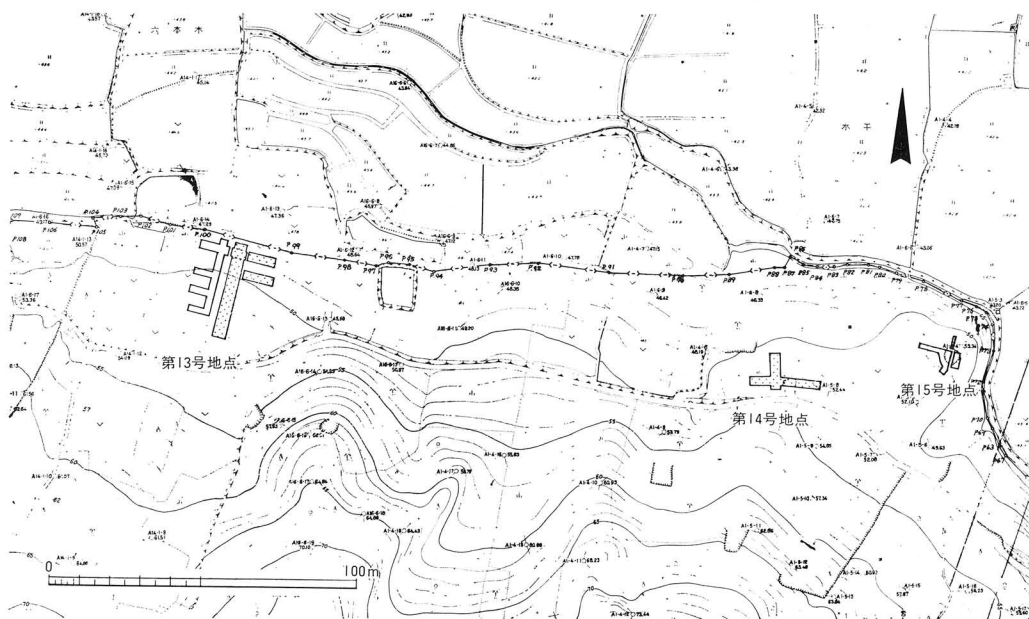
調査地は標高75～80mの西から東へゆるやかに傾斜する尾根筋に位置し、やや高まりがある。従来の分布調査で、土取りによって現れた土層に土師器片と木炭が散布することを確認している。地形の高まりの性格を確認するため、その長軸・短軸方向に直交する幅1.5mのトレンチを設定した。表土下には青灰色粘土の地山が全面にわたって現われ、遺物も出土せず、この高まりは人為的なものではないことが判明した。



第33図 第6号地点遺構図

V 歌姫地区の調査

調査地は奈良山丘陵の東端にあたり、南から北にのびる丘陵の末端部に位置する。第13号地点と第14号地点の2ヶ所を調査し、両地点は西と東に約200mはなれている。第13号地点では、第14号地点の東約60mに位置する第15号地点と共に1972年に調査を行っている。



第34図 歌姫地区地形図（網部分：本年度調査区）